

学級集団の構造といじめ問題に関する研究の概観と展望

教育心理学コース 唐 音 啓

A Review of Research on the Classroom Structure and the Bullying Problem

Yinqi TANG

The purpose of this paper is to give an overview, and discuss the reasons why bullying occurs, especially the research that deals with the bullies, the friends of bullies, and the structure of class groups. First, the review focus on the findings that related to the nature of bullying. Second, the relationship between the structure of class groups and bullying will be discussed. The significance of the hierarchical relationship of social status in the class was discussed in future bullying research. Implication of future research and prevention of bullying are highlighted.

目 次

1. はじめに
2. いじめとは何か
 - A. いじめの態様
 - B. 集団構造の差異によるいじめの分類
 - C. いじめ加害者を取り巻く仲間関係とは
3. 学級内で生じる影響力の個人差
 - A. 学級内地位研究の概観
 - B. Perceived Popularity と Social Popularity の弁別
4. いじめ研究において学級内地位に注目する意義
5. 結語

1. はじめに

学校社会におけるいじめは、未だ児童・生徒が抱える深刻な問題であり、その防止策の提案は学術的にも急務である。国立教育政策研究所（2016）による18年間に及ぶいじめ追跡調査の結果は、「深刻ないじめは、どの学校にも、どのクラスにも、どの子どもにも起こり得る」ことが、いじめの実態そのものであると報告している。いじめが社会問題として取り上げられるようになった1980年代より、数多くの研究がなされてきたが、近年のいじめの特徴として、加害者と被害者の立場が入れ替わるような「ロシアンルーレット型」が挙げられている（下田，2014）。加えて、小学生から高校生までを対象とした、いじめの加害・被害経験を尋ねた研究では（伊藤，2017）、いじめ加害を経験している児童生徒の約半数が、いじめ被害経験も

有することが明らかになっている。こうした知見からは、いじめの加害者と被害者の間には、明確な線引きがあるわけではなく、その役割が流動的なものであるという実情が読み取れるだろう。一方で、いじめの調査データを中心に、その実態をまとめた荻上（2018）は、誰もがいじめの加害者または被害者になり得るという事実を踏まえた上で、いじめの加害・被害リスクが高まる「ハイリスク層」の存在を見落としてはならないと指摘している。実際に、いじめの経験を問う研究の多くは、「加害群」、「両経験群」、「被害群」、「無経験群」といった群分けがなされ（e.g., 本間, 2003; 村山・伊藤・浜田・中島・野田・片桐・高柳・田中・辻井, 2015; 伊藤, 2017）、加害または被害経験のみを持つ子どもたちが一定数存在することもまた確かである。学校生活を送る中で、常にいじめの加害者や被害者であり続けるという事例は少ないものの、長期化、深刻化しているひとついじめでは、一定期間、加害者または被害者として日々を過ごしている子どもたちがいる、という構図もみえてくるのではないだろうか。そのため、いじめが全ての子どもたちに起こり得る可能性を念頭に置いた上で、どのような学級の、どのような子どもたちが、いじめの加害者や被害者、あるいはその両方を経験する傾向にあるかを論じることもまた、いじめ問題を理解する上で重要であろう。

いじめの定義には様々なものがみられるが、全てに共通する部分として、力関係のアンバランスとその乱用、が含まれる（e.g., 森田, 2010）。加害者と被害者の間には個人的な力関係が生じているだけでなく、加

害者側が集団を形成していることが多い。しかしながら、久保 (2013) が述べているように、いじめの心理学的研究ではこれまで、加害者や被害者の個人要因が検討されてきた流れの中で、その背後にある関係性が見落とされるきらいがあった。なぜいじめが発生するのか、というメカニズムの理解には、とりわけ、加害者を取り巻く仲間関係の理解が必須となるであろう。加えて、我が国のいじめのほとんどが教室内で生じている (金綱, 2015) ことを鑑みると、加害者集団を形成するような学級の性質を明らかにしていく必要性があると考えられる。近年では、いじめの抜本的な要因として、学級で生じる社会的地位の階層関係が指摘されており (e.g., 森口, 2007), その実証研究が蓄積されている渦中にある。

以上を踏まえて、本稿では、いじめで生じている関係性や、学級の構造について扱った研究を概観、考察することを目的とする。はじめに、どのようないじめがあるか、その態様や性質に関連する研究知見を整理したい。続いて、学級集団の構造といじめとの関連を整理し、今後のいじめ研究において、学級で生じる社会的地位に注目していく意義について考察を行う。なお、本稿では、いじめの認知件数が最も多い中学生 (e.g., 文部科学省, 2017) を対象とした知見を中心に扱う。

2. いじめとは何か

学校の現場で生じているいじめは多様であり、これまで、いじめの実態把握や類型別の介入示唆を目的として、その態様や集団構造の差異に注目した分類が行われてきた。本章では、はじめに、いじめでみられる態様について確認したい。続いて、いじめの集団構造に注目し、深刻化、長期化してしまう変容過程を追った研究や論説を概観する。その上で、いじめの発端となる加害者および彼らを取り巻く仲間関係について扱った研究を整理し、考察を行う。

A. いじめの態様

いじめには、どのような態様がみられるのだろうか。国内のいじめ研究の多くは、その攻撃形態に則して、主に、関係性いじめ、言語的いじめ、身体的いじめに分類がなされ、検討が行われている (e.g., 伊藤, 2017; 村山・伊藤・浜田・中島・野田・片桐・高柳・田中・辻井, 2015)。関係性いじめでは、「仲間はずれ、集団による無視をされる」、言語的いじめでは、「冷や

かしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」、そして、身体的いじめでは、「ぶつかられたり、遊ぶふりをしてたたかれたり、蹴られたりする」、といった項目で測定される傾向にある。研究によっては、身体的いじめを、直接的いじめ (e.g., 大西・吉田, 2010) とするものもある。なお、国立教育政策研究所 (2016) によれば、小中学生でみられるいじめのほとんどが、関係性いじめまたは言語的いじめである。

いじめは、こうした態様の違いによって、加害者の様相も異なると指摘されている。大西・吉田 (2010) は、関係性いじめと認知的共感性の関連を検討した結果、直接的な関連が見出せなかったことを報告しており、関係性いじめを行う加害者について、被害者の立場や心情を理解できないわけではないと示唆している。

B. 集団構造の差異によるいじめの分類

いじめの態様は前述のように、研究、調査問を通してある程度共通していることが窺える。しかしながら、加害者や被害者を中心としたいじめの構造は、捉え方や切り取り方によって解釈に差異がみられ、その類型や分類基準は、決して一様ではないと考えられる。本節では、いじめの集団構造を、変容過程の観点から実証的に明らかにした研究や論説を取り上げた。

いじめの様相を、縦断調査による変容過程から明らかにした多賀谷・岡本・加室・北村 (2000) は、3度にわたる調査において、いじめが継続していた31事例を取り上げ、①持続、②エスカレート、③転移、④連鎖、⑤逆転、⑥疑似消失の6つに分類できたとしている。31事例のうち、最も多かったいじめが、「持続」(20例)、次いで、「エスカレート」(5例)であった。多賀谷ら (2000) は、「持続」に分類された事例として、いじめの態様に多少の変化はみられるものの、加害者と被害者の関係が固定しており、同じ集団形態によって長期間いじめが継続している実態を示しており、「エスカレート」の事例では、中心となる加害者が変化せず、その規模が拡大していく模様を明らかにしている。多賀谷ら (2000) は、およそ1年間に渡る調査期間で継続していたいじめ事例を対象としているが、注目すべきは、継続していた事例のほとんどが、「持続」または「エスカレート」の類型をとっていたことにある。そして、「持続」と「エスカレート」のいずれも事例も、加害者と被害者の関係性に変化がみられない、という点で共通している。発生する全てのいじ

めが長期化、深刻化するわけではない中で、多賀谷ら(2000)の知見に基づけば、長期化、深刻化しているいじめの多くでは、集団における個々の立場が固定化され、その関係性から抜け出せなくなってしまっていると考えられる。加えて、多賀谷ら(2000)は、「エスカレート」に分類された事例の中に、加害行為を示す「リーダーの元に集まり、集団構造を形成」してしまっただけのものもあると述べており、いじめそのものが、仲間関係の形成や維持に繋がる動因となると指摘している。いじめを行うことで、加害者集団がその仲間関係を深めてしまう場合には、いじめが継続し、さらには深刻化するという負の連鎖が繰り返されてしまうのだろう。

なお、同じく、いじめ集団の様相の類型化を試みた橋本(1999)は、発達段階にも注目し、小学校から中学校にかけて、いじめ集団の構図が大きく変容する過程を示している。いじめ集団の四層構造を成す、加害者、被害者、傍観者、観衆のそれぞれの役割に触れながら、中学生でいじめが深刻化する要因として、傍観者層がいじめを認知しつつも関心を示さなくなった結果であると述べている(橋本, 1999)。橋本(1999)は、小学生時における加害者層のほとんどが、中学生時でも加害者層にあることから、いじめに対して関心が薄まる傍観者層ではなく、加害行為に関心を示し続ける加害者層こそが問題に問われるべきであると主張している。

加害者層に焦点を当てて、いじめの分類を行った研究としては、住田(2008)が挙げられるだろう。住田(2008)は、いじめが、被害者が身体的および精神的苦痛を抱いているという主観的な感情が前提であるとした上で、加害者の行為意図に基づいた類型化を行った。具体的には、(1)加害者が自己の行為をいじめと認識しているか否か、(2)加害者が被害者の苦痛を認識しているか否か、によって4つに分類している。そのうち、最もエスカレートしやすいいじめの類型として、(1)加害者が自分の行為をいじめと認識し、(2)被害者の苦痛も認識している、「加虐型」を挙げている。加虐型はいじめは、被害者の苦痛を認識した上で、刺激や興奮を求めて、加害行為を繰り返すという特徴を持つ。類似する知見として、いじめがエスカレートする要因について検討した久保田(2013)は、加害行為によって利益や快楽が得られる場合を挙げている。内藤(2001)もまた、加害者が得られる利益を考慮しながらいじめを行う点を指摘している。したがって、加害者の利害意識は、いじめの

深刻化を考える上で、重要視されるべき要素の一つであるといえるだろう。加えて、注視すべきは、彼らが決して、自分の行為の認識、あるいは被害者の気持ちが想像できないわけではなく、理解できる社会的認知能力を持ち合わせていながら、加害行為を示し続けている点にある。こうした、住田(2008)の加虐型に関する記述は、いじめにおける攻撃行動を概観した松尾(2002)の、いじめをする子どもたちの中には、社会的認知が正確な上で、標的となる子どもに苦痛を与える子どもも少なからずいる、という指摘と重なる部分がある。加虐型はいじめ加害者はまた、集団を形成し、被害者より優位な立場にあり続けることも指摘されており(住田, 2008)、彼らの仲間関係を築く能力の高さも窺える。

C. いじめ加害者を取り巻く仲間関係とは

本間(2003)は、いじめの加害経験を持つ子どものうち、加害を停止した群と継続した群に分けて検討を行っているが、その結果、「加害・継続群」は、いじめの期間が長く、程度も最も深刻であったことを明らかにしている。本間(2003)はさらに、「加害・継続群」の子どもたちの自尊感情が最も高かったことから、彼らについては、背後にある加害集団や学級集団との関係性を加味しながら十分に考慮すべきであると指摘している。

いじめの加害者が構成する仲間集団を論じるにあたって、そもそも、いじめの加害者がどのように捉えられてきたかについて触れたい。森田・清水(1994)によって、いじめの四層構造が提唱されて以降、いじめは、加害者、被害者、傍観者、観衆といった枠組みの中で語られるようになった。その集団的な視点から、加害者に限らず、被害者や傍観者、観衆は、いじめにおけるそれぞれの立場として、ひとくくりに検討される傾向にあった。もちろん、加害者を取り巻く集団や仲間関係を、細分化している研究も散見される。Salmivalli, Lagerspetz, Björkqvist, Österman & Kaukiainen(1996)は、いじめの加害行為を行う子どもたちのうち、「加害者(Bullies)」と「助長者(Assistants)」の役割の違いについて述べており、より中心的な役割を担う加害者と比較して、助長者はフォロワーのような存在であると位置づけている。とりわけ、欧米では、Salmivalli(1996)にならば、いじめの集団的視点を用いる際には、「加害者(Bullies)」と「助長者(Assistants)」を弁別して検討していることが多い(e.g., Pouwels, Lansu & Cillessen, 2018)。

国内では、餅川（2011）が、いじめを行う加害者について、いじめを首謀する子どもである「首謀者」と、いじめに積極的に加担する子どもである「加担者」を区別している。餅川（2011）はまた、加担者が、首謀者の気まぐれによっていじめの標的にされ得る可能性を指摘しており、同じ集団でありながら、首謀者と加担者の間に潜む、力関係の所在を示唆している。こうした、加害者集団内で生じている関係性に踏み込む必要性は指摘されているものの（e.g., Brown, 2011）、十分な検討がなされているとは言い難い。

その背景として、実証研究において、加害者を取り巻くの間関係性を明らかにする難しさが挙げられる。いじめの様態の一つである、関係性攻撃を検討した櫻井・小浜・新井（2005）は、中学生を対象とした関係性攻撃では、想定されていた「他者を操作する側」と「他者に操作される側」の概念分類が困難であったと報告している。関係性攻撃を頻繁に示す子どもをいじめの加害者としたときに、「他者を操作する側」、「他者に操作される側」はそれぞれ、餅川（2011）の言葉を借りれば、首謀者と加担者に位置づけることができると考えられる。櫻井ら（2005）は、両者の区別が困難であった理由として、関係性攻撃の複雑さに言及し、自己の社会的地位によって、「他者を操作する」、「他者に操作される」の両方の行動をとる子どもたちがいる可能性を指摘した。彼らは、社会的地位が高い子どもの指示は受け入れるものの、自己より社会的地位が低い子どもに対しては横暴な振る舞いをするような存在であるのだろう。こうした子どもたちについては、学級内の社会的地位に注目した Brown（2011）も問題視しており、学級内の社会的地位の高い子どもたちの周りには、彼らに「追従している子どもたち（followers）」がいると述べている。このように、社会的地位を如実に反映したような仲間関係のいびつさが想定されていながら、加害者は、集団としてひとまとめに論じられてきた。

加害集団そのものを扱った研究では、例えば、大西（2009）は、加害傾向が高い集団は、いじめに対する否定的な規範意識が低いと報告している。いじめに対して否定的な規範意識を持つことで、いじめが生じにくい集団を形成できるだろう。しかしながら、鈴木（2015）は、中学生および高校生では、いじめに対して否定的な規範意識を持つ子どもたちは、集団内で優勢になりやすく、そのため、いじめを拒絶するような規範が、学級や仲間集団内で受容されにくい傾向にあると述べている。集団への影響を与えやすさには個人

差があり、いじめに対して否定的な規範意識を持つ子どもたちが必ずしも、集団の規範を左右するような影響力を持つわけではないことが考えられる。しかしながら、いじめに対して否定的な規範意識が低い子どもたちが、学級や集団の規範を左右できる場合に、いじめが生じやすくなり、さらには長期化、深刻化してしまうだろう。次節では、いじめ加害集団と、彼らが学級に与える影響性、という観点から、学級内における社会的地位との関連について考察していくこととする。

3. 学級内で生じる影響力の個人差

いじめの研究は、被害・加害生徒の個人特性を問題視するものから、集団構造を問うものへと変遷を辿り（e.g., 杉原, 1986; 森田・清水, 1994）、近年では、いじめの抜本的な要因として、学級で生じる社会的地位が注視されるようになってきた（e.g., 森口, 2007）。本章では、学級内で生じる社会的地位を、学級内地位と表現し、いじめとの関連を扱った研究を中心に概観していくこととする。はじめに、国内で行われた研究を主として、学級内地位といじめとの関連を検討した知見を整理し、その上で、近年、欧米で蓄積されてきた“Popularity”研究といじめとの関連を確認し、その後の議論へと繋げたい。

A. 学級内地位研究の概観

学級内地位研究では、ソシオメトリック法や指名法といった研究手法を用いて検討が行われることが多い。ソシオメトリック法や指名法は、例えば、あなたが最も遊びたい人は誰か、という質問項目に対して、ふさわしいと思う生徒の名前を挙げさせる測定方法である。同級生の名前を挙げさせるような、直接的な手法を用いることで、学級集団や仲間集団内の関係性が考察されてきたものの、国内では、1980年代に、倫理的に問題視されて以降、学級内地位そのものを扱う研究が下火となっていた（石田, 2002）。

しかしながら近年、学級内に潜む社会的地位の格差こそが、いじめの温床となっているという指摘がなされて以降（森口, 2007）、国内では、「スクールカースト」（鈴木・本田, 2012）や「クラス内ステイタス」（久保田, 2018）といった用語を中心に、その実証的な検討が進められている。例えば、作田（2016）は、中学生において、スクールカーストそのものへの認知といじめの経験が関連していることを明らかにしてい

る。類似した知見として、久保田（2018）は、中学生を対象とした質問紙調査によって、学級内のグループ間に影響力の差異があると回答した生徒ほど、学級内のいじめを認識していたと示しており、クラス内ステータスが生じることで、いじめが発生しやすくなる可能性を指摘した。また、社会的勢力理論の観点からスクールカーストを考察した児玉・南（2017）は、スクールカースト上位者には、いじめの加害者になりやすい特徴を持つ子どもたちがいると明らかにしている。こうした研究知見より、学級内地位の差に対する認識が強まるほど、いじめが生じやすく、さらには学級内地位の高い子どもたちが、ときに、いじめ加害者となりやすいことが考えられる。

一方で、学級内地位そのものが、いじめと結びついているわけではないという知見もみられる（水野・加藤・太田，2019）。水野ら（2019）は、中学生を対象とした大規模な質問紙調査の結果、自己の所属集団が学級内で中心的か否かと、いじめとの関連が非常に小さなものであったことから、これまで方々で指摘されてきた、スクールカーストといじめとの関連は認められないと結論付けている。スクールカーストやクラス内ステータスといった、学級内地位は、あくまでも、何らかの基準によって学級内で生じる階層関係（水野，2016）を表しているに過ぎない。児玉・南（2017）の知見が明らかにしているように、いじめ加害者の特徴を持つ子どもたちだけが、スクールカーストの上位層に君臨しているわけではない。学級内地位といじめとの関連を検討する上では、学級内地位の高い子どもたちの様相に、より注視していくべきだと考える。

B. Perceived PopularityとSocial Popularityの弁別

学級内地位の高い子どもたちに関する研究は、主に欧米において、ソシオメトリック法や指名法を用いた仲間関係研究の文脈で検討がなされてきた。唐（2018）でも触れているが、近年では、学級内地位の高さを論じる際には、“Sociometric Popularity”（周囲から好感を持たれること）と“Perceived Popularity”（周囲から「人気者」と知覚されること）を弁別して扱うことが主流となっている。“Sociometric Popularity”が、例えば、「学級内で、あなたが一緒に遊びたい人物は誰ですか」といった項目内容で測定される概念であるのに対して、“Perceived Popularity”は、「学級内で、あなたが最も人気だと思ふ人物は誰ですか」といった項目内容で評定されるものであり、必ずしも個人の好悪感情が反映されるわけではない（Cillessen & Mayeux, 2004）。留意

しておきたいのは、両者の概念は、発達段階によってその重なり度合いが異なり、中学校で最も弁別されるようになる（Bowker & Rubin, 2010）。そして、“Perceived Popularity”のみが高いとされる子どもたち、すなわち、学級内で「人気者」と知覚されている子どもたちほど、他者に対していじめ加害行為を示すことが明らかになっている（e.g., Pouwels et al., 2018）。

このように、欧米では、学級内地位といじめとの関連が、主に仲間関係研究において検討されてきた。しかしながら、水野（2019）が指摘しているように、我が国では、スクールカーストを始めとする学級内地位に関する実証研究が圧倒的に不足しており、その知見が積み上げられている渦中にある。石田（2007）は、学級内地位に対する認識が最も高くなる発達段階は中学生であることを示しているが、これは、先述した欧米で得られている知見（Bowker & Rubin, 2010）と一致しているといえるだろう。一方で、いじめは、その文化差も指摘されていることから（金綱，2015）、検討が進む中で、我が国特有の、学級内地位といじめとの関連が見出されるかもしれない。

4. いじめ研究において学級内地位に注目する意義

ここまで、いじめの態様や集団構造の概観に始まり、加害者を取り巻く仲間集団と学級内地位の高さとの関連について論じてきた。本章では、いじめ問題を考えるにあたって、学級内地位の高い子どもたち、とりわけ、“Perceived Popularity”の高い子どもたちに注目していく意義として、彼らの行ういじめの影響性と深刻さ、介入の難しさに触れながら考察していきたい。

学級内地位の高い子どもたちは、前述のとおり、周囲に対して影響性を持つ子どもたちであり、規範意識を変化させる力を持つ。大西・吉田（2010）は、いじめ加害傾向の高い集団は、いじめに対する否定的な規範意識が低いことを明らかにしていたが、例えば、学級内地位の高い子どもたちが、いじめに対して否定的な規範意識を持つとき、その学級でいじめが生じる可能性は低くなることが想定できるだろう。対して彼らが、いじめに対して否定的な規範意識を持たないとき、学級でいじめが生じやすくなってしまふかもしれない。第1章で触れたように、長期化、深刻化するいじめの多くは、加害者と被害者の立場が固定される環境が続いてしまうという問題点を持つ（多賀谷ら，2000）。学級内地位は、固定的であり、変動しにくい

と指摘されている (e.g., 鈴木, 2015)。学級内地位の高い子どもたちがいじめを行った場合に、加害行為が継続されやすいゆえ、深刻化に繋がることは、十分に考えられるだろう。

加えて、本稿では、関係性いじめや加害型はいじめを行う加害者の特徴として、仲間集団を形成や、社会認知的能力が決して低いわけではないことを指摘したが、こうした特徴はとりわけ、学級内で人気者と知覚されている子どもたちと通ずる部分がある (Pouwels et al., 2018)。彼らがいじめに関わる事例では、その立場ゆえに、周囲より加害行為が黙認されやすい。さらには、彼らが持ち合わせている社会認知的能力ゆえに、教師や保護者といった第三者の目にも触れにくくなり、介入が困難になると想定される。

いじめ問題の予防を考える上では、現象そのものに注目するだけではなく、背景にある仲間関係や学級の構造を丁寧に紐解く必要があるだろう。学級内地位の高い子どもたちと、彼らの仲間集団に注視し、彼らがどのようなメカニズムを持って学級に影響をもたらしているのかを問う中で、彼らがいじめをする場合について考慮することが、いじめ問題の理解に繋がると考える。

5. 結語

本稿では、いじめ研究において、加害者や加害者を取り巻く仲間関係、そして学級集団の構造を扱った研究を整理、考察し、いじめの予防的観点に繋がるものとして、学級内地位に注目することの重要性について論じた。いじめ研究ではこれまで、その態様や実態、構造を中心として、多くの知見が蓄積されてきたが、学級内地位に関連する実証研究は蓄積されている渦中にある。本稿では、学級内地位の高い子どもたちの様相を弁別した上で、いじめとの関連を検討する必要性を論じた。今後は、さらなる実証研究の積み重ねが求められるだろう。

引用文献

- Bowker, J.C., Rubin, K.H., Buskirk-Cohen, A., Rose-Krasnor, L. & Booth-LaForce, C. 2010, "Behavioral changes predicting temporal changes in perceived popular status", *Journal of Applied Developmental Psychology* 31: 126-133.
- Brown, B. B. 2011, "Popularity in peer group perspective. Popularity in the Peer System", 165-192.
- Cillessen, A.H. & Mayeux, L. 2004, "From censure to reinforcement: Developmental changes in the association between aggression and social status", *Child development* 75: 147-163.
- 橋本摂子, 1999, 「いじめ集団の類型化とその変容過程」『教育社会学研究』64:123-142.
- 本間友巳, 2003, 「中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応」『教育心理学研究』51(4): 390-400.
- 石田靖彦, 2007, 「各学校段階におけるスクールカーストの認識とその要因」『愛知教育大学教育臨床総合センター紀要』7: 17-23.
- 伊藤美奈子, 2017, 「いじめる・いじめられる経験の背景要因に関する基礎的研究」『教育心理学研究』65(1): 26-36.
- 金綱知征, 2015, 「日英比較研究からみた日本のいじめの諸特徴」『エモーション・スタディーズ』1(1): 7-22.
- 国立教育政策研究所, 2016, 『いじめ追跡調査 2013-2015』.
- 児玉真樹子・南晴佳, 2018, 「周囲からみたスクールカースト上位者の特徴: 社会的勢力に着目して」『学習開発学研究』11: 3-12.
- 久保順也, 2013, 「児童生徒間のいじめに関する心理学的研究の展望」『宮城教育大学紀要』48: 229-241.
- 久保田真功, 2018, 「クラス内ステータスの構造とその発生メカニズムの検討: 中学生を対象とした質問紙調査をもとに」『教職教育研究: 教職教育研究センター紀要』23: 43-54.
- 松尾直博, 2002, 「学校における暴力・いじめ防止プログラムの動向」『教育心理学研究』50(4): 487-499.
- 水野君平・加藤弘通・太田正義, 2019, 「中学生のグループ間の地位といじめ被害・加害の関係性の検討」『対人社会心理学研究』19: 14-21.
- 餅川正雄, 2011, 「学校のいじめ問題に関する研究 (IV)」『広島経済大学研究論集』34(2).
- 森口朗, 2007, 『いじめの構造』新潮社.
- 森田洋司, 2010, 『いじめとは何か』中公新書.
- 森田洋司・清水賢二, 1986, 『いじめ: 教室の病い』金子書房.
- 村山恭朗・伊藤大幸・浜田恵・中島俊史・野田航・片桐正敏・高柳伸哉・田中善大・辻井正次, 2015, 「いじめ加害・被害と内在化/外在化問題との関連性」『発達心理学研究』26(1): 13-22.
- 内藤朝雄, 2001, 『いじめの社会理論: その生態学的秩序の生成と解体』柏書房.
- 荻上チキ, 2018, 『いじめを生む教室: 子どもを守るために知っておきたいデータと知識』PHP新書.
- 大西彩子・吉田俊和, 2010, 「いじめの個人内発生メカニズム—集団規範の影響に着目して」『実験社会心理学研究』49(2): 111-121.
- 岡安孝弘・高山巖, 2000, 「中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス」『教育心理学研究』48(4): 410-421.
- Pouwels, J. L., Lansu, T. A., & Cillessen, A. H., 2018, "A developmental perspective on popularity and the group process of bullying", *Aggression and violent behavior*.
- 作田誠一郎, 2016, 「『スクールカースト』における中学生の対人関係といじめ現象」『佛大社会学= Studies in sociology』40: 43-54.
- Salmivalli, C., Lagerspetz, K., Björkqvist, K., Österman, K., & Kaukiainen, A. 1996. "Bullying as a group process: Participant roles and their relations to social status within the group", *Aggressive*

Behavior: Official Journal of the International Society for Research on Aggression, 22(1), 1-15.

- 櫻井良子・小浜駿・新井邦二郎, 2005, 「中学生における関係性攻撃傾向の検討—同調行動および学校適応感の関連」『筑波大学発達臨床心理学研究』17: 39-44.
- 下田芳幸, 2018, 「中学生のいじめ認識傾向と攻撃行動との関連性」『佐賀大学大学院学校教育学研究科研究紀要』2: 21-28.
- 杉原一昭, 1986, 「いじめっ子といじめられっ子の社会的地位とパーソナリティー特性の比較」『筑波大学心理学研究』8: 13-72.
- 住田正樹, 2008, 「いじめのタイプとその対応」『放送大学研究年報』25: 7-21.
- 鈴木翔, 2015, 「なぜいじめは止められないのか?」『教育社会学研究』96: 325-345.
- 鈴木翔・本田由紀, 2012, 『教室内（スクール）カースト』光文社.
- 多賀谷篤子・岡本淳子・加室弘子・北村洋子, 2000, 「子どもたちの人間関係における「いじめ」の変容過程の一考察」『こころの健康』15(2): 72-79.
- 唐音啓, 2018, 「いじめ研究における加害者像を再考する」『東京大学大学院教育学研究科紀要』58.

(指導教員 遠藤利彦教授)